広報 ちくしの
Chikushino No.1121
2018年11月15日号

文化薫道

～文化の風が吹くまち ちくしの～

問い合わせ先／文化財課（歴史博物館内）
☎（921）8419

万葉花 ―其の三十五―

をみなへし
秋萩交じる
蘆城野は
今日を始めて
よろづよに見む

秋萩の花

これは、今から約1300年前、蘆城駅家（あしきのうまや）で詠まれた歌で、『万葉集』に収録されています。

駅家（うまや）とは、古代国家が全国の道路沿いに整備した施設で、都との連絡手段などに使われました。大宰府にほど近い蘆城駅家は、その任務を終えて都へ戻る官人の送別の場でもありました。それゆえ、『万葉集』には、いくつもの歌が残されています。

蘆城（あしき）とは、現在の筑紫野市阿志岐・吉木一帯を指しており、阿志岐の地名の由来でもあります。

冒頭の歌は、「女郎花（おみなえし）と秋萩（あきはぎ）が交じって咲く蘆城の野を、今日を始まりとして、いつまでも見ていこう」という意味で、野に咲く女郎花や萩の花に乗せて、風光明媚（めいび）な阿志岐の姿を歌っています。

しかし一方で、一般的に「女郎花」や「萩」などは、妻や恋人などの女性に例えて詠まれることの多い花です。都から赴任した官人たちにとって、大宰府は遠く離れた西辺の地です。都に残した家族や恋人、慣れ親しんだ故郷を思って、この景色をいつまで見なければならないのか、と嘆いているのかもしれません。

季節感豊かなこの歌にも、いくつもの思いを込められたことが感じられます。多面性を読み解くこともまた、『万葉集』の楽しみ方のひとつではないでしょうか。

発行／筑紫野市　編集／秘書広報課
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西一丁目1番1号 ☎092(923)1111 FAX092(923)5391
印刷／久野印刷株式会社
発行部数／41,700部